

令和6年度 静岡市在宅医療・介護連携協議会
第2回啓発研修部会・地域支援部会の合同会議

- 1 日 時 令和6年12月12日（木）19：15～20：15
- 2 場 所 オンライン
- 3 出席者 （出席）＜啓発研修部会＞吉永部会長、近藤委員、坪井委員、平野委員、
矢野委員
＜地域支援部会＞小作部会長、石上委員、小長井委員、近藤委員、
成島委員
（事務局）地域包括ケア・誰もが活躍推進本部
在宅医療・介護連携推進係 山本係長、北原副主幹、白鳥主任主事
- 4 傍聴人 0人
- 5 次 第 （1）開会
（2）挨拶
（3）議事
①報告事項
在宅医等養成研修・専門職研修について
②協議事項
ACP（人生会議）の普及啓発について（案）
（4）閉会
- 6 会議内容
（1）開会 開会宣言及び会議成立の報告（委員9名全員の出席により会議は成立）
（2）挨拶
（3）議事

事務局

在宅医等養成研修・専門職研修についての説明（資料1）

吉永部会長

研修は、清水医師会でも大変評判が良かった。既に在宅医療を行っている医師が多いこともあり、医師向けに何かあってもよかったのではという声を聞いた。

石上委員

エンディングノートの中身はとても良いことが書かれていると思う。しかし、エンディングノートというと、終活というイメージがあり、元気な方はまだまだと思う方も多い。医療や福祉専門職は、エンディングノートの存在が大事なものとわかっていて、病院ではエンディングノートはある種のドナーカードだと言っている。ドナーカードというと、皆さんも知っているとおり、その人の意思の記録ということで、受け入れやすいのかなと思った。

平野委員

エンディングノートを作るにあたり、表題をどうするかと本当に悩んだ。遠まわしな言い方の方がいいのではないかという意見もあったが、わかりやすい方がいいということと、これからを豊かに生きるという思いを副題に込めた。特に、昔は家族がいたが今はひとり者という方であったり、民生委員だけが関わっているというような場合に、きっかけとしてうまく使ってもらえればという思いで、表題も含め、中身も相続であったり、今までの振り返りなどいろいろ入れさせてもらった。これから使いながらネーミングも、改めて磨きをかけていくこともあるかと思う。

小長井委員

清水区の入江地区のS型デイサービスで、地域包括支援センターの職員がエンディングノートを紹介していた。市民にうまく伝えていくには、社会福祉協議会とよく話し合い、まとめ役の方を引き込んでいく必要があると思った。

平野委員

エンディングノートを使っている事例を見ながら、こんなふうに使ってもいいということとを積み重ねて、広めていくことがこれからの段階なのではないか。今、小長井委員がおっしゃるようなことも含めて、きめ細かく、いろいろな広め方をしていくということが大事になろうかと思う。

近藤委員

今年の静岡市ケアマネット協会の総会で、各介護支援専門員にエンディングノートについて紹介した。10月23日に静岡市介護保険事業者連絡協議会、清水介護保険事業者連絡会、ケアマネット協会の3団体で研修会を開催し、エンディングノートについての説明や、事例報告をした。自分のお母様に書いてもらった事例と、利用者に勧めて書いてもらった事例であった。参加者より、事例があると皆さんとてもわかりやすかったとお話があった。

他にも、民生委員と介護支援専門員の交流会にて、エンディングノートについて紹介をした。民生委員は、利用者とともに近いところにいる。事例を挙げて、市民に近いところで広げていかないと、なかなか進んでいかないのかなと感じた。

坪井委員

訪問看護ステーション連絡会の集まりで、エンディングノートについて話をしようと考えている。訪問看護利用者からエンディングノートにまつわるような話があれば、書いてみましょうと勧めている。比較的一人暮らしの方が今後の不安を訴えてこられることが多いので、「一人暮らしの会」のような集まりがあれば、そこで紹介するのもいいと感じた。

吉永部会長

まさに、一人暮らしの方はどう思われているのかを知りたい。清水区で警察協力医をする中で、死体検案で非常に独居の方が多く、周りとの付き合いがあまりなかったり孤立していたりなどで、その方の考えていたことや生前のことは全く想像がつかない。そのような方たちが何を考えていたのか、どのようなことをよしとしていたのかなどを表現できるようなものはすごく大事だと思う。

事務局

ACP（人生会議）の普及啓発について（案）（資料2）

矢野委員

シルバー人材センターに講演を依頼され、「病院の上手なかかり方」をテーマに話をすることで、人生会議についても話し、エンディングノートのアクセス先も案内した。このように、いろいろなきっかけからエンディングノートを知っていけるようにするとよいと思う。ACPや終活に興味のある人はアクセスする機会があると思うが、他のテーマであっても話題の中にちりばめていくことで、普及の裾野がさらに広げられるのではないかと感じた。

行政の方から、いろいろな方が使えるパワーポイント資料のような普及啓発のためのツールがあると、裾野が広げられるのではないか。

成島委員

いくつかのパターンがあると思うが、広める役の人向けの講習会のようなものやってもいいのかなと思った。その中で、近藤委員が言われていたように、評判が良かった事例もあると思うので、例えば訪問看護の立場で利用者さんに説明するにはとか、あるいは家族としての立場で親に説明するにはとか、介護支援専門員の立場でそれを進めていくためにはといったように、何かちょっとした脚本やそれぞれのシーンに合わせたミニ動画のようなものを作ってもらえれば進めやすいと思った。それで、講師向けの講習会のときに説明のツールにその動画を使うとか、もちろん、それはいつでもアクセスできるように市のホームページであったり、生涯学習交流センターなどに、どんどん案内するのもいいと思った。

あともう一点、リーフレット案だが、少し目がチカチカすると感じた。いわゆるカラーユ

ニバーサルデザインというのがあり、配色の組み合わせや文字の組み合わせで、色弱、目の異常ではない、個人差ぐらいのレベルでも見えやすさ、見えにくさがある。また、字のフォントについて、大きさや種類も含めて、目が見えにくい方、色弱の方、個人差がある方、誰もが手に取って読みやすいものにアレンジしてもらえるといい。

小作部会長

裾野を広げることに関連して、長田地域包括支援センターでは、本年度「おさだっぷ」という事業で、全7回シリーズで毎月講座を行っている。きっかけは、元々、介護保険申請に来られる方で、「お守りの的に申請したい」とか、「地域包括支援センターと繋がっていたいからとりあえず申請しに来る」というような方も結構いらっしゃり、そのような話を聞いたときに、もう少し自助の力をつけていった方がいいのではないかとあったところであった。講座の内容を考えていくときにエンディングノートが出来たので、エンディングノートを活用できるような組み立てにしていこうということで講座を行っている。エンディングノートというと、死の準備に向けた準備として活用していくような形に捉えられがちなので、人生をふりかえり、これから生きがいを持って生きていくというところに焦点を当てて行っている。

リーフレット案について、文字数が多いのが少し気になった。他市のエンディングノートのチラシを見ると、奈良市のエンディングノートのチラシは「私の未来ノート」というエンディングノートではない名称をつけたものになっており、神奈川区は「エンディングノートを使ってみましょう」というように、あまり文字数を多くせずに、ひと目見てわかる方が手に取りやすいのではというのを感じた。

吉永部会長

エンディングノートも場合によっては、画像や写真などを入れ込んで作成するのもいいと思う。特に自分史が最初の方のページにあるので、人生の振り返り、あとは大切な思い出とか、そういったところに若い世代とは違うから文章でもいいような気はするが、文を書くのがある程度苦手な人も中にはいるかもしれないので、そういうときに自分にとって大切な思い出として写真が1枚出てくると、それが文章よりも、もっと多くを語るということはあるかもしれない。書くところの事例や解説があったほうが、みんなが書きやすいと思う。

平野委員

エンディングノートを書くとき、家族が何人かいる場合は、年末年始やゴールデンウィークなど、皆さんが集まるきっかけのときに最期を迎えてしまいそうな年齢層だけではなくて、孫の世代とか、その息子娘の世代から話し合いのきっかけに使ってもらうのも一つの手なのかなと思っている。1回書いても、その後また1年1年、年を重ねたねと言いながらもう1回見直してみるという話にもなっていけばいいと思っている。専門職の育成と共に、

底上げも大事だと思う。エンドオブライフ・ケア協会の小澤竹俊先生は、人生の最終段階に関わる人材の育成とともに、若い世代へのアプローチとして、命の授業という若者の折れない心を育てる取組もしている。吉永部会長がおっしゃるように、SNS は若い世代がよく使うツールなので、そこからアプローチしていくのがいいと感じる。

成功事例、うまくいかない事例、そういったものも具体的に挙げてもらいながら、行っていければよいと思う。

小作部会長

地域包括支援センターで関わりを始めたときには、既に認知症が重度で、情報がとりにくく、身寄りもない方がかなりいる。どのような人生を送ってきたのか、持病はあるのかなど、本人達から語ってもらうのが難しい方が増えてきている。そのようなときのためにも、エンディングノートを書いておいてもらえると汲み取りながら支援できる。亡くなるときよりもっと前の準備段階から必要なものだと感じる。

成島委員

どうやって広めていくのがいいかというところの話だが、せっかく本日は市民委員のお二人がおられるので、市民委員の視点からこういう感じだといいのではないかというご意見をもらえると、とても参考になると思うので、ご意見をいただきたい。

石上委員

広報紙に終活について載っていたが、一般の方が見てとても参考になると思った。1 回だけではなく、定期的に出してもらえればより多くの方が目にすると思う。また、先日、社会福祉協議会の講座を受けたが、講師が芸能人で、老若男女とても幅広い世代の人が見えていた。そういう場で、エンディングノートの紹介をすれば知ってもらえると思った。

小長井委員

先ほどの小作委員に見せていただいた、奈良市や神奈川区のチラシは、見た印象で、興味が湧くような気がした。リーフレット案にあった「終活」という言葉だが、母が認知症で兄にエンディングノートの話をしたときに、縁起の悪いこと言うなと一喝された。これが現実であったりすると思うので、もっとプラスに転換でき、明るく、目を引きやすいものであれば、いろいろなところで見てもらえるのかなと思う。

吉永部会長

できるだけ先手を打って若いうちからということにもなってくるでしょうし、でも現実には今、そういったことを考え始めなくてはいけない世代の人たちにも、もちろんやってもらいたいところなので、そこへの持っていく方というのは、難しい反面、皆がこれをわかって

いけば、当たり前のことというようになっていくような世の中にしていかななくてはいけないと思う。そういう意味では、まさに宣伝のやり方が大事ということになってくる。エンディングノートの表紙で言うなら「これからの人生を豊かにしていくために」というその副題をいかに強調していくかということになってくると思う。

成島委員

このエンディングノート自体は、「エンディングノート」は大きい題名で、副題で「これからの人生を豊かにしていくために」というのがあるが、リーフレットでは、逆に「これからの人生を豊かにしていくために」を大きくして、サブタイトルが「エンディングノート」ではないが、先ほどいくつかご紹介いただいたようなわかりやすく目を引きやすい感じに変えていきながら、まさに「これからの」というのを強調するような作りにしていければいいと感じた。

近藤委員

エンディングノートは高齢者のものではなくて、私達自身が今、話ができなくなったら、自分が倒れてしまったら、自分の思いをどのように残していくかということが大事なので、決して終活ではなくて、これからの人生、自分の今まで生きてきた人生のことを受けとめたらどうですかということをお話させていただくと、皆さんとてもわかりやすいと言っている。成島委員のおっしゃったように、エンディングノートの導入の仕方を上手にしていきながら、広めていくのがいいのではないかと考えている。

(閉会)

■会議録確認署名

「令和6年度 静岡市在宅医療・介護連携協議会 第2回啓発研修部会・地域支援部会の合同会議会議録」について、内容を確認しました。

静岡市在宅医療・介護連携協議会 啓発研修部会 部会長

氏名（署名）

吉永 浩介

■会議録確認署名

「令和6年度 静岡市在宅医療・介護連携協議会 第2回啓発研修部会・地域支援部会の合同会議会議録」について、内容を確認しました。

静岡市在宅医療・介護連携協議会 地域支援部会 部会長

氏名(署名) 小作 徳光